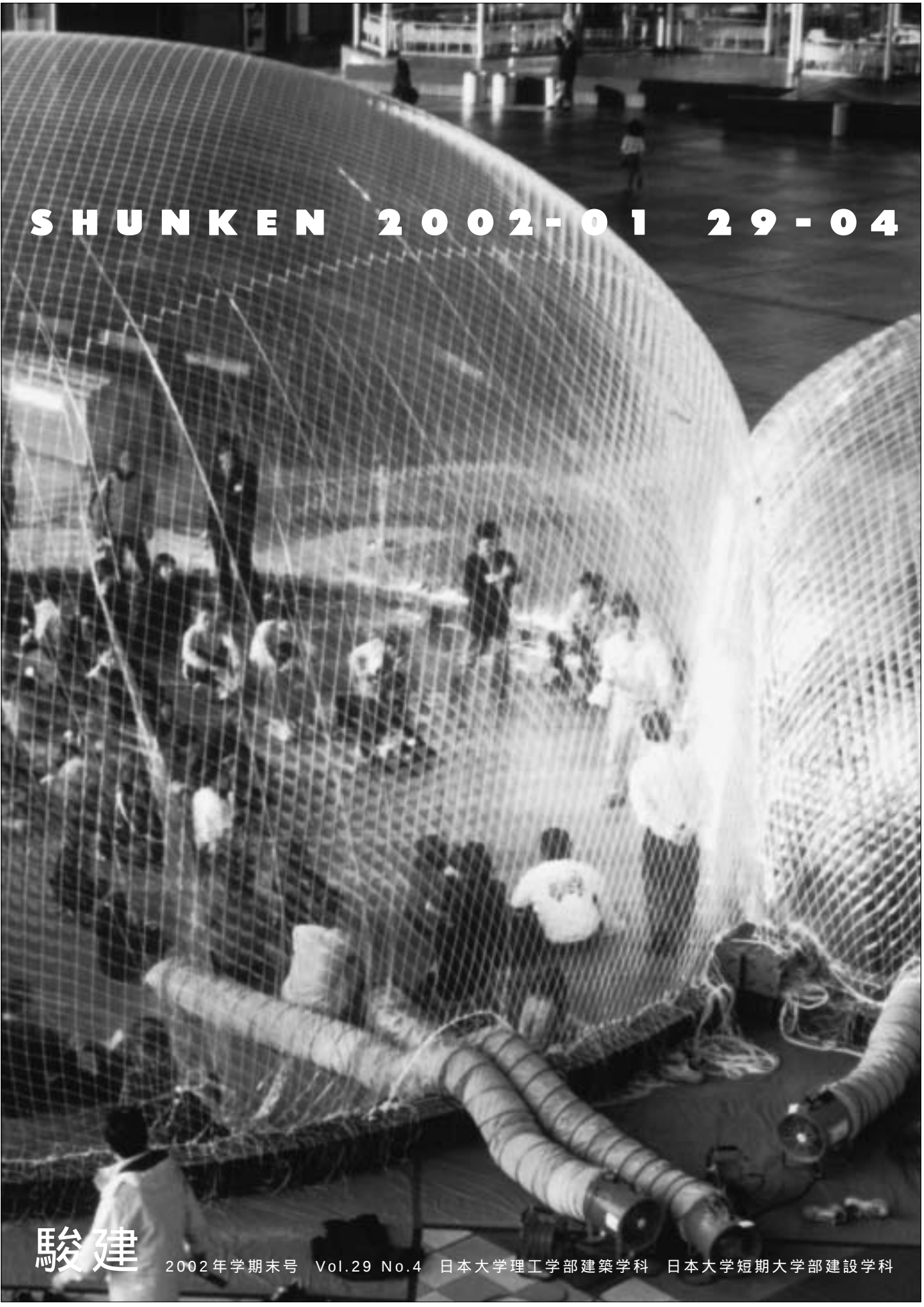




S H U N K E N 2 0 0 2 - 0 1 2 9 - 0 4

駿建

2002年学期末号 Vol.29 No.4 日本大学理工学部建築学科 日本大学短期大学部建設学科

Feierabend.

日本大学理工学部&ダルムシュタット工科大学共同セミナー／ワークショップ2001

佐藤直樹



夏。ドイツのダルムシュタット工科大学から15人の学生と2人の先生（ハウシュルツ先生とクリスチャン先生）がやってきました。日本大学理工学部との共同デザインワークショップを行うためです。ダルムシュタット工科大学は理工学部と姉妹校で、ワークショップを行うのは2回目です（今回は、1999年にダルムシュタット工科大学で開催）。

2回目である今回のテーマは「Electric Square “AKIHABARA”」。東京の中でも特異な場所である秋葉原電気街界隈に焦点をあてて、そこへ建築物に限らず、その場所にふさわしい具体的な何かを提案しようというものでした。9月10日(月)から20日(木)の11日間で行われたワークショップには、理工学部からは、建築、海洋建築工、社会交通の各学科から27名の学生と、斎藤先生、若色先生、本杉先生、今村先生、岡田先生、渡辺先生、佐藤慎也先生と僕（佐藤直樹）が参加し、ゲストクリティックとして高宮先生、小泉雅生氏（C+A）、横河健氏（横河設計工房）を迎えて行われました。参加した学生は、ドイツと日本の混成で、7つのチームに分かれて作業を進めました。

この11日間は、ワークショップはもちろんのこと、お酒や東京見物にも大忙しでしたので、参加したメンバーに感想を伺ってみました。また、ワークショップを窺っていた僕からも報告します。

まず、M1の戸内広太郎君と日下部寛之君、多田吉宏

君の対談から。

戸内：一番大変だったことは？

日下部：言葉。ゆっくりしゃべってくれないと、コミュニケーションができなかった。

多田：だんだん慣れてくると、何を言いたいのかぼんやりわかるようになったけど。言葉に関しては、周りが日本語だらけだから、逃げ道はあったんだろうね。

戸内：そういえば、料理の品の説明がすごく面倒でした。

日下部：うん、お寿司のネタの説明やビールと発泡酒の違いを説明するのは難しかったな。

多田：それに結局、全部説明させておいて、「ビール」だし……。（笑）

戸内：それで、ワークショップの内容については？

多田：設計の作業は、絵を通して自分の考えていることを伝えられるから、無理なくできたと思う。

戸内：うん、絵に頼っていましたが、実際。

日下部：あと、驚いたのは、話し合いや作業が進んで、いい雰囲気だなと思っていたら、いきなり5時になって、「今日は、ここまで」って、すぐ帰ってビールを飲み始めている。

戸内：Feierabend!!（仕事の後の自由時間）

多田：ドイツ人は最終プレゼンテーションの前日もやっぱり、普通に帰って、日本人は徹夜で案も仕上げる形になっていたな。

日下部：でも、一部のドイツ人は日本のスタイルに合わせて徹夜してくれたね。



敷地模型を用いて説明



秋葉原をキーワードや絵で書き出す



ハウシュルツ先生のレクチャー

夢田：それは、班によってまちまちだったかも。

戸内：う～ん。仕事をする時間をしっかり決めて、自分の時間を有意義に使う。みんなとお酒を飲んだり、建築を見たりとか。そうした、ドイツ人の時間の使い方は、私たちも見習うところがあると思います。それで、いい案はできた？

日下部：うん、結構いい案だったかな。班のみんなと意見が一致したし。

夢田：まあ、あれはあれでいいじゃん。交流が目的だから、もっといいのづくりたかったけど。

日下部：一番の思い出は？

夢田：やっぱり、ニューヨークのテロかな。ホテルのロビーに帰ってきたらテレビで放送していてびっくりした。

日下部：ドイツの学生も真剣に見ていた。

戸内：はじめは、日本語のニュースしかなかったから、説明するのが大変でしたね。

夢田：でも、さんざん説明した挙げ句、すぐBSで英訳がでて、逆にこっちが聞くはめになっちゃった。でも、今思うと貴重な体験だったな。

日下部：うん、貴重な体験の連続だったよね。

戸内：そう考えると、このワークショップの意義って、やっぱり結果よりプロセスのほうにあるのでしょうか。

夢田：それはみんな、そう思ってるよね。

日下部：やっぱり、違う文化との交流ができたことはすばらしい。

続いて、M1の平山香さん。

今回このワークショップに参加して、普段、日本にいた間には、経験をする事のない、楽しい時間が過ごせたと思います。英語づくしの毎日。電車から聞こえる雑談も英会話に聞こえてくるそんな11日間でした。

ワークショップを始めてから、物事、設計を考える上でのコミュニケーションに言語能力不足による意志疎通の難しさはあったと思います。理解していると思っていても、肝心なところでの行き違いが何度ありました。それが、よく転んだり、また逆だったり。そしてできた作品は、いつもとは違った視点からの意見と、パワフル



ハウシュルツ先生と斎藤先生と
若色先生による鏡割り

なものになったと思います。英語が話せる、話せないではなく、問題はどうかして伝えようと努力すること、怖じ気づかず、前向きに取り組むこと、であった気がします。話せなくても、絵で見せたり、何かしらの他の手段で通じるのです。本当によい経験をしたと思います。

また2年後に行われるとき、多くのみなさんに経験してもらいたいです。

次は、M1の大西正紀君。

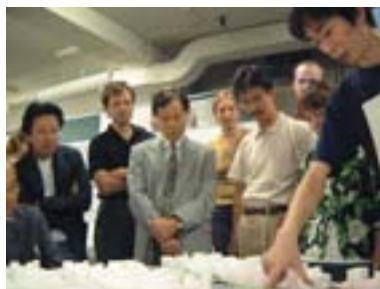
今回のワークショップは、多くの事柄を学ぶよい機会でした。その中でも特に感じたのは、日本とドイツの文化の違いでした。多くの人が海外との交流を通して感じると思いますが、共同で何かをつくる上では大きな壁として私達の前に立ちはだかりました。

私達が最も苦労したのは、われわれのワークスタイルとの違いです。日本の場合、その日のノルマが終わるまで仕事をするといったワークスタイルが一般的ですが、ドイツでは、夕方になったら仕事が残っていたとしても、その日の仕事を終わらせる考え方なのです。ショックの大きいことでした。

もう一つ驚いたことが、日本人とドイツ人ではその個人のキャラクターが似ていたということです。これは、当たり前なことだと思われるかもしれませんが、文化の違いをまず意識して、日本人とドイツ人では決定的に違うのだと思いこんでしまっていたので、ワークショップが進んでいくにしたがってそれがわかったことは、私に



中間プレゼンテーション



模型を使ってプレゼンテーション



ダルムシュタットの皆さんから歌のプレゼント

とって新鮮なことでした。

私は、今回のワークショップでは特に国際交流の重要さを学びました。日本人の語学力の低さや海外への意識のなさは、今後、国際社会へと変容していく日本の社会の中では早急に解決されなければならない問題のように思われました。そのためには、私達一人ひとりが世界を視野に入れた学問展開をすることと、このような機会を学校側が多く用意できる体制になっていることが重要なことだと思います。今回、このようなすばらしい機会を与えてくれた大学に感謝します。今後も、このワークショップが続いていくことを願います。

そして、M1の下田典大君。

実際にワークショップをやってみた感想として、文化や生活のまったく違う人々との交流はやはり勉強になる部分が多く、よいものだと感じました。生活に関することから建築に対する取組み方も含めて、物事の捉え方、またその進め方にも大きな違いがあり、その違いにとまどいながらも、そこから得るものも多くなりました。また、勉強になる反面、自分の伝えたいことがうまく伝わらなかったときや、相手の言っていることがよくわからないときも多く、もどかしく思うこともありましたが、ドイツの学生と日本のいろいろな観光地や建築を見に行ったり、みんなで食事をしたり、夜更けまで飲みながら話したことは非常に楽しかった時間でした。

最後に、M1の星野諭君。

あっという間に過ぎたこの11日間、とにかくおもしろかった。異なった環境で育ってきたものが同じチームでやると、考え方や価値観、やり方に違いがあり、さまざまな問題にぶつかります。しかし、それがおもしろいのです。お互いのどこに共感でき、どこが違っているのか、どこに焦点を当て、どうやって問題を解決していくか、などを言葉というコミュニケーションがうまくとれない中で、絵や模型、体を使って、試行錯誤しながらの過程、そういった「プロセスのおもしろさ」をこのワークショップで知ることができました。そして、今回改めて「楽しむことの大切さ」を学んだ気がします。また、あのメンバーと一緒にやりたいです。いつか建築家として……。

以上が、参加した学生の感想です（全員ではありませんが）。彼らの感想からもわかるように、参加した学生は英語に苦労しながらも、ワークショップだけではなく、みんなで食事をしたり、家に招いたり、休日を過ごしたりしながらコミュニケーションをとって、お互いの理解を深めていきました。一人ひとりが、こうしたがんばりを意識しながらできたことが、ワークショップの成功に

つながったのだと思います。掲載した写真からも、それが窺えると思います。

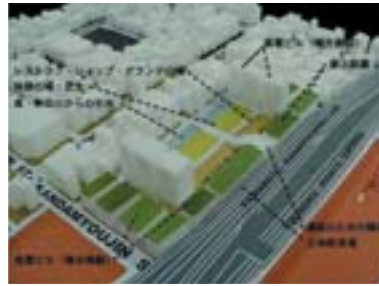
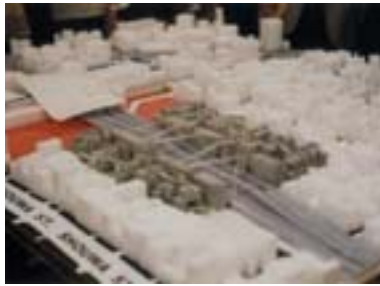
僕はというと、僕は英語ができない、だから、今回のワークショップに参加することが決まったときは、正直ビビりました。でも、実際に彼らとコミュニケーションをとると、彼らはとても紳士的で、僕の単語を連発するだけの言葉に、真っ直ぐに耳を傾けてくれて、理解しようとしてくれて、しかも、僕の単語の連発を英文にして教えてくれました（恥ずかしいですが）。単語の連発でも、ある程度は会話が成り立つことがわかって、少し気が楽になったのですが、日が経つにつれて、難易度が高まり、わからないことも多くなってくるし、聞きたいことや伝えたいことも多くなってくるし、もっと深くコミュニケーションしたいって欲はでてくるのに、英語ができないからそれができない。できない自分にだんだんイライラしてきて、「あーっ、もう！」って、どうして英語ができないんだろうって、がんばってあげばよかったって、とっても後悔しました。だから、なんとなくではなくて、しっかりと伝えられるようにするために、まず、ちょっぴりずつ勉強を始めました……。

それから、ワークショップのホームページがあるのでそちらも見てください。アドレスは、<http://www.arch.cst.nihon-u.ac.jp/dws2001/>です。



Team 1

Friedemann Benrath
Heike Schubert
日下部寛之（本杉研M1）
小西 芳博（若色研4年）
高田 千種（社会交通3年）



Team 2

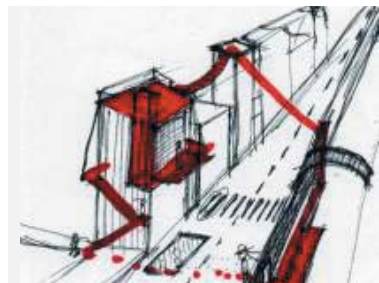
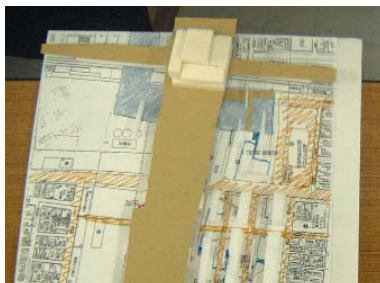
Insa Reichenau
Sebastian Grau
大西 正紀 (高宮研 M1)
滝川 佑介 (高宮研 M1)
萩原麻衣子 (社会交通 3 年)
宇井 良晃 (海建 3 年)

Team 3

Hans-Peter Kuner
Nicole Bach
戸内広太郎 (高宮研 M1)
田島 敬悟 (社会交通 4 年)
林 幸希 (建築 3 年)
舟岡 徳郎 (海建 3 年)

Team 4

Lydia Brueke
Jana Grundmann
平山 香 (高宮研 M1)
平田 真貴 (今村研 M1)
大沼 郁俊 (社会交通 4 年)
田村 真吾 (海建 3 年)



Team 5

Ken-Christian Peine
Ralf Schlachte
Verena Grips
星野 諭 (関澤研 M1)
羽根田 健 (社会交通 M2)
小林 由佳 (若色研 4 年)
中島 香織 (建築 2 年)

Team 6

Berit Jennrich
Johannes Thoma
落合美令奈 (今村研 M1)
多田 吉宏 (今村研 M1)
中林 薫 (社会交通 M1)
山下 忠相 (海建 3 年)

Team 7

Kai Bischof
Sebastian Meuschke
下田 典大 (斎藤研 M1)
野中 太郎 (関口研 M1)
呉 有紀 (斎藤研 4 年)
竹内 正人 (関澤研 4 年)

フォスターの感動・リーベスキントの衝撃

海外出張報告 1

半貫敏夫

British Museum,
Great Court



ロンドンへ

JABEE 関連資料のまとめを斎藤主任と岡田章先生 + 岡田 WG にお願いして、あわただしくロンドン、ヒースロー空港直行便に乗り込んだのが9月7日。ホントに前日まで JABEE にかかりきりで旅行の準備もろくにできず、以前、下着を旅行鞆に入れ忘れた苦い経験はさすがに身にしみていてこれだけは忘れずにきちんと点検、建築技術の宿題は旅行中にやることにしての出発であった。早朝、自宅から上野へ出る電車の吊革にぶら下がりながらメガネを研究室に置き忘れていたことに突然気がついて大学経由に経路変更、研究室に「泊まり」の院生を踏まないように注意しながら首尾よくメガネを入手、成田には「若干の余裕」をもって到着した。

イギリスに9日間滞在して気がついたことのひとつは、この季節、日本に比べて雲が低いことであった。したがって天候の変化も劇的で、あのターナーの風景画は本当だったのである。ロンドンでの行動予定は Ove Arup 事務所を訪ねることと British Museum、地下鉄新線 Jubilee Line + Docklands の探検(?)であった。

フォスターの感動

— Great Court とドイツ連邦議会新議事堂 —

British Museum へは3日間通い詰めた。(ちょっと皮肉な見方をすれば) 大英帝国時代の略奪品の宝庫(?)を落ち着いて見ることも目的のひとつであったが、Museum の中庭; Great Court をガラスの大屋根で囲い込んだフォスタープロジェクトを体験するのが主目的であった。100m × 70m の矩形の中庭中央には円形の図書閲覧室(1857年建設)がある。このロトンドと周囲の建物を支点として単層ラチスドームを組み、遮光タイプのペアガラスパネルを組み込んだ大空間は、古色蒼然とした、いかめしい Museum 入り口を抜けた直後に劇的かつ明快なオープンスペースを作り出しており、Museum 空間の一体化と周囲にある展示空間へのパブリックな導線の核を

つくるという所期の目的を十分に果たしていて、ガラスの掃除はどうやってするのだろうという疑問を一瞬忘れさせるほどの感動であった。視覚的には軽快に感じられるこの大屋根も構造体の総重量は約500トン、ガラスユニットの総重量が180トンもあるらしい。ちょうどこの時期、Museum の一角で Foster Studio の作品展示が行われていて、椅子のデザインから都市空間の設計まで、Foster Studio の幅広い活動をとっても効率的に勉強することができたのは幸運であった。

ロンドンからノッティンガムに移動し、Nottingham Trent University のアカデミックな雰囲気の中で構造物の Rehabilitation に関する国際シンポジウムに出席してきちんと勉強した後、Berlin に移った。よく晴れた日曜日の午後、Berlin のブランデンブルグ門の近く、ドイツ連邦議会新議事堂を訪ねた。観光客の一人として新議事堂を見学する長蛇の列に加わって待つこと3時間、厳しいボディチェックを経てリフトで屋上に上がり、ようやくフォスター空間に入り込むことができた。ここもまた Great Court とは違った感動を与えてくれた。これは1894年に完成したドイツ帝国議事堂ビルの大改修プロジェクトで、見所は大会議場をカバーする鉄とガラスのドーム構造である。直径40m、高さ23.5mのラミネートガラス貼り半球構造の内側に幅1.6mの斜路が螺旋状についていて、見学者がドーム頂部まで歩いていけるようになっている。そしてこの斜路がドーム構造のリブの役目も兼ねている。透明なガラスドームなので太陽光のコントロールは螺旋通路内側の可動サンシールドによって行う。ドーム頂部から会議場の天井に向けて竜巻のようなミラーガラスのモニュメントが吊り下げられている。このほか(案内パンフレットによると)省エネルギー、環境保全に隠れた配慮がいっぱいあるらしい。構造設計上からは、既存の歴史的建築物をどこまで生かして新しい建築システムと共存させたのか、力の流れも含めて、出来上がったひとつの「解」の設計プロセスが興味を引くとこ

ろである。伝統的な石の建築と新素材による新しい建築機能の融合を、ほとんど違和感を与えずにまとめていることが、どうも私の感動の一因らしい。地震のエネルギーを心配しなくてもよいという構造環境上の利点も痛感させられた。快晴の新議事堂屋上からの展望はすばらしく、水と緑に恵まれた Berlin 再開発の概要と現状が一目で理解できた。

リーベスキントの衝撃

—ユダヤ博物館の不思議な空間—

同じ Berlin で Jewish Museum を訪ねあてたときにはホントに驚いた。NY テロのリアクションで Museum 前に装甲車と重装備の兵士が警戒にあたっていることにも驚いたが、厳重なボディチェックを受けて博物館の中に入り、リーベスキントの空間を体験したときにはもっと驚いた。はずかしながらあまり建築家リーベスキントの知識がなかったもので「なんじゃこりゃ!」というのが第1印象、しかしこの Museum を出るまでの約4時間の間に私はすっかり洗脳されてしまったのである。この Museum 新館へは、古風なバロック様式のベルリン博物館を通して長く深い階段を降りた地下からアプローチする。平面形を見ると稲妻のようなジグザグの連続形をした展示空間を観客の導線となるヴォイド空間が貫く構成である。われわれ観客は標識の示す通りに暗い斜路を進むと、Berlin におけるユダヤ(人)の歴史がいろいろな切り口でテーマ別に見られるようになっている。これらの展示空間がそれぞれ変化に富んでいておもしろい(あのジグザグ形では変化しない空間をつくるほうが難しいともいえる)。いま自分のいる場所が平面形のどこにあたるのかも、落ち着いてよく考えないとなかなかわからない。ギャラリーを移動中、随所に壁を切り裂いたような独特の窓があって閉所恐怖症を和らげてくれるが、基本的に館内の照明は人工照明である。斜路が多いので F.L.Wright のグッゲンハイム美術館のように常に肉体が緊張を強いられていて、平面上に直立することの有難さが外に出るとよくわかる。ちなみに主要構造は鉄筋コンクリート造(RC でなければできそうにない形)で、外



Jewish Museum, Berlin

装にはガルバリウム鋼板が使われている。それにしてもこの3次元的複雑さに、施工業者は相当泣かされたのではないかと同情する。この Museum は開館したばかりであまり知られていないためか、日本人はほとんど見かけなかった。唯一大阪工大の学生が来ていて同じ構造系だったこともあって意気が合い、そのあとベルリンオリンピックスタジアムの裏手にあるホルスト・コルバー・スポーツセンターの見学にも同行し、久しぶりに日本語の会話を楽しんだ。

おわりに

まだ皆さんに報告したいことがたくさんあるが、与えられたスペースの都合上、今回はこれでおしまいにする。また別の機会を期待したい。ロンドンの Ove Arup 事務所では元気に働く斎藤研究室出身の中原英子さんに会って、同僚の日本人スタッフらとともにいろいろな話を聞くことができた。また、世界的な経済不況といわれながら、西欧の主要国ではインフラ整備を計画的かつ着実に進めている現実を見るにつけ、日本の政治と公共事業計画の不安定さをしみじみと反省させられた。国会議員や官僚諸氏は海外視察で一体何を見てきているのだろうか。「建築家はもっと社会に向けて発言しなければならない」という心構えの大切さも痛感した。9月という大学が非常に忙しい時期に、世界を見る機会と時間を与えてくれた関係各位に心から御礼を申し上げて結びとする。特に建築教室・JABEE 運営委員会の先生方には当分の間、頭が上がらない状況である。(はんぬきとしお・教授)



Nottingham Trent University の会議場で



ドイツ連邦議会新議事堂



ホルスト・コルバー・スポーツセンター

カリフォルニア大学 デービス校を訪れて

海外出張報告 2

森泉和人



キャンパス内のオアシス

2000年4月から約11か月、カリフォルニア大学（University of California、以下UCと略します）デービス校に研究留学する機会を得ました。そこでこの研究留学記なのですが、私の研究活動については省略し、本稿ではアメリカの大学の雰囲気を感じ取っていただけるような報告とさせていただきます、これが海外留学等を考えている志の高い学生の参考にしていただければ幸いです。

さて、UCデービスの位置するカリフォルニア州デービス市は、サンフランシスコから車で北東へ1時間ほど走ったところに位置し、とてものもんぴりとした雰囲気の漂う人口約5万人の大学町です。サンフランシスコを中心とするベイエリアは、気温の変動が少なく、年中過ごしやすい気候が続くことで有名ですが、デービスでは夏は40度以上、冬は10度以下となり、日本のようにしっかりとした四季感があります。また、カリフォルニア・ワインの産地として有名なナパバレーやスポーツリゾート地のタホ湖も日帰りレジャー圏内にあり、ヘルシー・ライフを志向する方にはお奨めの田舎町です（田舎町のおかげで、昨年、カリフォルニア州を騒がせた、電力会社の破綻による停電事件とも無縁でした）。

UCデービス

UCデービスは9つあるUCのキャンパスのうちの1つで、約100年前、UCパークレー校の農場であったことからスタートし、現在は、人文、工学、農学、医学部を有するUCの中でも比較的規模の大きな大学となっています。中でも農学系のプログラムの充実ぶりは有名で、世界中から多くの農学研究者が訪れています。また、先ほど述べた開校の歴史的経緯と車で1時間弱の比較的近い距離にあるため、UCパークレーとは各種交流が盛んです。

ところで、「なぜ構造工学の研究者が農学の有名なUCデービスに研究留学なの？」と不思議に思われるようで、建築学科の先生からよく質問を受けました。初めにそのことについて説明しておきます。今から4年ほど前、私

はコンクリートの破壊力学と非破壊検査に関する国際会議に出席し、ゲスト・スピーカーとして招かれていたUCデービスのJhon Bolander先生と初めて知り合いました。私の研究内容にも興味をもって接してくださり、それ以来、論文をいただいたりのお付き合いをさせていただきました。今回の研究留学についてもBolander先生にEメールで問い合わせると、海外生活に多少の不安を感じている私を気遣ってか（？）、数時間後には「すぐいらっしゃい、アパートは大学の近くがいいだろ？」と心温まるEメールのリプライをいただいたのがUCデービス即決にいたった理由でして、以来、研究のみならず、渡米準備、現地での生活など、本当にお世話になりました（今更ですが、人との出会いは大切にしておきましょう）。

私がお世話になったUCデービス工学部の土木・環境工学科は、今から約30年前に設置された比較的新しい学科ですが、環境工学、地盤工学、水理工学、構造工学、交通工学といった一通りの講座を有し、現在は約40名ほどの教員が所属しています。構造工学グループにはBolander先生以外にも若手の有能な先生が多く、塑性力学のDafalias先生、有限要素法のRashid先生、メッシュレス法のSukumar先生など、今後の世界の数値計算力学の発展を担うような若手研究者が揃っています。また、環境工学グループの研究面での活躍や地盤工学グループが保有する世界一大きな遠心載荷装置も有名で、今後、大学ランキングとして有名なUS News誌で上位ランキングを得る日も近いかもしれません（ちなみに、2001年度版では、UCサンディエゴと並んで土木工学部門の21位でした）。私の滞在中、アメリカ土木工学会が主催する学生のコンクリート・カヌー大会のカリフォルニア州予選会でUCデービスは1位を獲得し、「カズ（私の当地での呼ばれ方）、パークレーに勝ったぞ！」と教員、学生とも喜んでいたのが印象的でした。UCパークレーの研究業績には敬意を払いながらも、心の奥底に潜むライバル心（？）は相当なものと想像されました。

アメリカの大学における教育システムと留学のススメ

アメリカの大学の研究レベル、教育システムは、文句なく世界一でしょう。なぜそうなのか？ 渡米前から私は非常に興味をもっていて、今回の研究留学でその一端を知ることができたのは大きな収穫のひとつでした。

私が最も感心したことは、「教育＝トレーニング」といった考え方が徹底していたことで、あたかも体育会系の日々の練習のごとく、時間間隔をおかずに基礎の反復が行われるアメリカの大学の講義でした。まず、アメリカの大学で一般的な週3回の50分講義について紹介します。「なっーんだ」と思うかもしれませんが、私たち日本人も、小中高校では、1科目当たり週に複数回の授業を行い、基礎的な教養を「すりこむ」ような授業を受けています。それと同じようなことを大学でも行い、アジア系留学生に比べて不足がちなアメリカ人学生の基礎学力を補い、同時に勉強癖をつけさせているのです（大学入学時の学力は日本人学生のほうが上です、詳しくは後述）。また、日本の大学における「～演習」、「～実習」的な名前をもつ科目はあまり見当たりません。どんな科目でも週1回くらいの頻度で小課題（Quizと呼ばれます）が課されるのが普通なため、わざわざ講義名称を「～演習」とするのが無意味なのです。実験も講義の一環として行われるのが一般的で、体験を伴う実験実習作業が講義の進度に合わせて実施されます。私も大学院の講義科目を受講させていただきましたが、大学院の講義においても適宜実験が組み合わされており、ある程度の専門知識が高まった修士学生に対しても、基礎的な実験は非常に教育効果が高いことを実感できました。

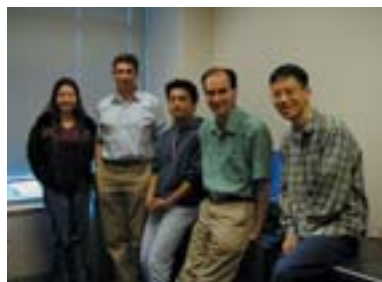
学生の皆さんがここまでの話を聞くと、「アメリカの大学生は窮屈なスケジュールで大変そうだ、自分にはそこまで頑張れない」と感じる人が多いかもしれません。確かに日本の大学生の生活に比べて大変そうですが、意外にも、日本をはじめとするアジア系の留学生は、言葉のハンデを乗り越え、優秀な成績で卒業するケースが多いという興味深い話を聞いたことがあります。高校までに培った数学、理科等自然科学系の基礎知識が豊富なアジア系の学生は、大学生生活のスタート時点でアメリカ人学

生より成績面で優位にたちやすく、よい成績を維持することが一種の楽しみになってくるんじゃないかと想像できます。

また、日本の大学で課題をちょくちょく出す先生は、学生からみて「嫌な先生」となりがちですが、アメリカの大学生の間では、「あの先生は私たちのために定期的に課題をつくってくれ、採点も面倒くさがない良い先生だ」という評価につながります。“Office Hour”と呼ばれる質問受付時間帯をあらかじめ学生に通知しておく制度も徹底しており、Office Hourになって研究室に学生が群がることを「どうだ、私はこんなに学生に好かれている」とニコニコしながら自慢します。日本では、「アメリカの研究大学の先生は学部教育を手抜きしている」というのが通説ですが、これは大きな間違いです。UCサンタバーバラ校に教授として招かれた、青色発光ダイオードの開発で有名な中村修二先生も、「大変なのは講義準備」と漏らしています。講義、課題、Office Hourでの学生へのアフターケア、どれか一つでも手を抜いた教授は、日本でも一般化してきた授業評価（Evaluation）で酷い評価を受けることになります。合理的な教育（トレーニング）システムを基盤として優秀な研究者によるわかりやすい講義が展開され、凡人学生を秀才にし、さらには次世代を担うトップレベルの研究者をつくりだしてゆく……先端科学や工学分野におけるアメリカの人材の豊かさがわかっていただけたと思います。

皆さんご存知のようにアメリカの世情は非常に大変ですが、平和が戻ったとき、皆さんの中に「アメリカの大学で頑張ってみよう」と思う人がいたら是非相談に来てください。アメリカの大学ではWEBページが充実しているため、講義カタログ等もすべてWEB経由で入手できます。実際に留学しなくても、日本の教育プログラムといろいろ比較してみるのも面白いと思います（UCデービスのWEBページ <http://www.ucdavis.edu> をご覧ください）。

最後になりましたが、今回の研究留学の機会を与えてくださった日本大学と建築教室に感謝して、私の研究留学記とさせていただきます。（もりいずみかずと・助手）



ラボのメンバー（右から2人目がBolander教授）



キャンパス内のメインストリート



コンクリート・カヌー

2年オリエンテーション報告

東京建築ウォッチング / 1, 2組 合同懇親会

建築学科のオリエンテーションは、例年2年生を対象に父兄協力会の協力を得て行われています。これまでは、建築学科の先生方と2年生全員が大型バス（50～55名）に分乗、7～8コースに分かれて都内や近郊の建築見学・工場見学・現場見学などを行ってきました。

今年度は、もう少し授業と関連性をもたせてはどうかというクラス担任や学生生活委員の先生方の提案もあり、試行的に建築設計の授業に合わせて実施することになりました。

2001年10月27日（土）当日は好天に恵まれ、遠くは国際コンペで注目を集めた横浜の大さん橋国際客船ターミナルの工事現場から、近くは建築の博物館といわれる上野公園まで1, 2組計14班（14コース）に分かれ、少人数で建築ウォッチングが実施されました。引率も含めて254名、全体で約6割の参加者でした。

都内の建築がほとんどなので一人でも行けるわけですが、建築設計の先生や大学院の先輩達のコメントを聞きながら改めて見学するのも、建築の見方など製図室ではできない貴重な体験となったのではないのでしょうか。

夕方6時から、駿河台校舎901講堂に臨時に設定さ

れた会場で、1, 2組合同の懇親会が行われ、見学先から約200名が駆けつけ、平土間に作られた12のテーブルを囲んで和やかに開催されました。非常勤の小川、城戸崎、中村の3先生方のスライドの上映や、前建築学科主任の斎藤先生、引率を手伝ってくれた計画系TAの自己紹介、クラス担任の自己紹介などが会を盛り上げてくれました。2年生は駿河台での授業は週1日と少なく、1, 2組のクラスを越えて、学生同士、先生方、先輩達と話す機会も少ないわけですが、今回の懇親会は交流するよい機会となったと思います。

建築学科にとって10月27日は、オリエンテーション（2年生）、就職ガイダンス（3年生）、卒業制作の提出日（4年生）と、それぞれの学年でいろいろな行事が重なりあわただしい1日となりましたが、参加された皆さん、引率の専任・非常勤の先生方、そして大学院のTAの皆さんは、ツアーコンダクターの役目ご苦労様でした。

（渡辺）

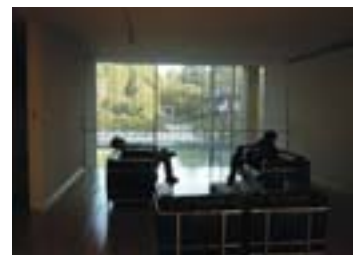
2年クラス担任：今村雅樹・蜂巢浩生・岡田章・渡辺富雄
学生生活委員：橋本修



NEW TOKYO LIFESTYLE ROPPONGI
THINK ZONE



国立西洋美術館



東京国立博物館法隆寺宝物館



大さん橋国際客船ターミナル工事現場



客船ターミナル現場の工事内部

平成14年度 卒業研究テーマ一覧

3年生までは建築の基礎を幅広くしっかりと勉強し、あまり早急に専門分化しないほうがよいとわれわれは考えています。しかし、大学生活の最後を迎える4年生は、各研究室に所属して、一つの研究テーマに取り組み、それを掘り下げることになります。そして先生方と膝を交えて話し合い、就職や大学院への進学相談、大学院生との交流などを通して、教室では望めない人間的なふれあいと相互のコミュニケーションを得ることによって、建

築学生にふさわしい実力を蓄え、かつ大学生活の最も有意義な思い出がつくり出されるものと考えています。3年生諸君は4月からの卒業研究着手に向けて、以下のような各研究室の卒業研究テーマや、『駿建』2001年4月号にのっている昨年度の卒業生の就職動向などに目を通して、自分が4年生になってやってみたいことをよく考えておくことを希望します。

以下の研究テーマは、建築学、企画経営両コースの学生が自由に選択することができる。

(計：計画系、構：構造系、50音順)

構———安達俊夫教授・山田雅一助手(駿433-A・B号室)



本研究室は、建築に関連する地盤工学および基礎構造を主な研究対象としている。

平成14年度の卒業研究は、次の5つのテーマを計画している。

1. 砂地盤の液状化特性に関する研究

液状化特性に与える地震動の2方向入力の影響と液状化発生時の地震動の強さについて、地盤系オンライン地震応答実験法により検討する。

2. 改良地盤の強度・変形特性に関する研究

セメント系改良土の強度・変形特性について、中空ねじりせん断試験により検討する。

3. 粘性土地盤の動的強度評価法に関する研究

原地盤のシルト・粘性土の動的物性のデータを蓄積するとともに動的強度の評価法について検討する。

4. 住宅建築における基礎設計と地盤調査に関する研究

平成12年4月に「住宅の品質確保の促進等に関する法律」が施行され、住宅建築をとりまく技術的基準が著しく変わりつつある。欠陥住宅をなくすための基礎設計法と地盤調査法について検討する。

5. 地震により発生した地盤の液状化被害に関する研究

近年に起きた地震により発生した地盤の液状化被害に関して文献の調査を行う。また、液状化簡易判定法を用

いて被害状況との比較および検討を行う。

上記テーマについて、標記教員2名と大学院生4名が協同して指導に当たります。

卒業生の就職先は、他の研究室と同様に建設業と住宅産業が大半である。ここ数年の大学院生は、大手建設会社の技術研究所や施工管理部門、官公庁に就職している。

構———石丸辰治教授・石垣秀典助手(駿454号室)



1. 対(地)震性能設計法に関する研究

2. 制震(振)構造の実用化に関する研究

1995年阪神・淡路大震災を契機に、免震・制震構造物の数は急激に増加し、最近では建築センターに申請される高層建築物のほとんどが、何らかのエネルギー吸収装置を設置した制震構造物であるという状況にまでなっている。免震・制震構造物が普及した大きな理由が、地震時の安全性を高めることが可能であるということと言ってもいいが、それらの技術を活用して地震国における長寿命建築物を実現することが、地球環境の視点から要請されているという背景が存在していることも忘れてはならない。

本研究室では、免・制震技術をより一層普及させ、21世紀の社会に貢献していくための具体的な研究テーマとして、低コストな免・制震部材の開発、軟弱地盤上での免震構造システムの開発、廃材を有効活用した免・制震部材の開発などを挙げて活動を行っている。また、今後急速に普及すると予想される戸建免震住宅や伝統的な木造建築物の制震改修プロジェクトなどにも携わっており、

実施設計を通じて建築計画・設備計画・構造計画を融合させた対(地)震システムを構築することも大きなテーマのひとつである。

卒業生の就職傾向については、構造設計事務所、ゼネコンの現場・構造設計部・技術研究所などへの就職が多い。また、官公庁・建設コンサルタント会社、あるいは、鉄道・電力会社の建築部門に就職する者も増えつつある。

計——井上勝夫教授・橋本 修講師・富田隆太助手
(駿582-A・583-A号室)



建築の目的は、安全で快適な空間の創造にある。空間性能を左右する多くの要因の中で、音・振動は、その制御や対策の基本が、建築の設計・施工に関係することから建設後の改善は非常に難しい。

当研究室は、建築の音・振動環境に対する社会的・学術的要求に応えるべく、現象を物理的に捉えるだけでなく、感覚的側面からのアプローチ、さらには人間工学的見地からの検討も併せて研究を行っている。

1. 住宅の騒音・体感振動の制御に関する研究

このテーマは、住宅内で発生する騒音・振動、住宅内に外部や他住戸から侵入する騒音・振動の制御方法を、構造・デザイン・材料・施工法等から検討するもので、具体的には次のような項目が挙げられる。

- (1) 上下階の床衝撃音遮断性能の予測と対策方法
- (2) 住戸間隔壁、外壁の遮音性能の改善方法
- (3) 居住床の振動感覚と対策技術の検討

2. 住宅の音環境に対する性能表示に関する研究

住宅を対象とした消費者保護のための「性能表示制度」が実施されて1年が経過した。この研究は消費者が要求する住宅の性能レベルを明確にし、性能表示制度で示す性能ランクとの対応を検討することによって、今後の性能表示制度のあり方について検討する。

3. 居住床のかたさ感覚と快適性・安全性に関する研究

建築と人間の直接的接点は「床」である。よって、床には安全性や快適性に関する性能が特に要求される。この研究は、人の歩行時における快適性向上のために、かたさ感覚を中心として床の仕上げ構造仕様を検討するものであり、対象を高齢者まで拡張し、人間工学的面からの考察も試みる。

4. 子供の音環境に関する研究

成長期にある子供たちにとって、聴覚系を通したいろいろな体験は、将来の感性や考え方に大きく影響する。

この研究は、子供たちが多くの時間を過ごす小学校を対象として、音環境の実態調査、意識調査などを行うとともに、教室空間等の模型実験などから、将来の学校建築、すなわち子供の音環境について検討する。

5. 建築物の電磁環境の制御に関する研究

聞こえず、感覚で捉えられない電磁波は、電子機器の誤動作や通信機器の混信、さらには生体系への影響までが懸念され、建築分野でも重要な問題になりつつある。本テーマは、電磁波の物理的側面からの基礎的考察、建築物内の実態把握、設計・構造・材料によるシールド効果などについて検討する。

6. 公共空間における音声情報伝達に関する研究

公共空間における音声アナウンスは、利用者に対する情報伝達手段として重要な役割を担っている。この研究は、建築空間における音声の明瞭性評価を工学的に検討し、情報伝達がスムーズで安全な建築空間のデザインを提案する。さらに光表示など視覚情報が加わった場合の人間の知覚反応を検討して、よりの確な情報伝達方法についても考える。

7. 電気音響システムを用いた音響シミュレーションと音場評価

ドームや屋外スタジアムなどで音声アナウンスや音楽パフォーマンスを行う際には、スピーカを用いた電気音響拡声が行われる。このテーマではコンピュータ・シミュレーションを用いて視覚的に音場を把握し、音声情報伝達を含めた音場評価・設計ツールを開発する。また、模型実験や音場合成による擬似音場評価を行いながら建築形態や内装デザインを検討し、快適でユニークな音響空間の実現を目指す。

就職先は、環境系にとらわれず、音・振動制御技術を+α能力として身に付け、広い業種に就職している。就職先については、教員が綿密な相談を行い、活発な就職活動を支援しています。平成13年度の主な就職先は、大学院(4)、建設会社(2)、エネルギー系(1)、運輸・輸送(1)、住宅産業(8)、設備系(4)、コンサルタント(1)、その他(2)でした。

研究室ホームページも参照のこと。

URL : <http://feeling.arch.cst.nihon-u.ac.jp/>

計——今村雅樹助教授(駿589-A号室)



今村研究室は設計・デザインの研究室です。将来、本堂に建築やインテリアの設計の仕事に就きたい学生を対象

に、厳しく指導をしていきます。研究室に入ると、各自のテーマに基づいた卒業設計以外に、研究室としてのコンペや実際の建築設計・計画のプロジェクトに参加して、充実した建築家予備軍としての生活が待っています。この日本大学から一人でも多くの建築家やデザイナーを生み出すために、熱意と感性のある学生を受け入れます。

今村研究室の5原則は、

- ・「建築家・デザイナー」を目指す。
- ・「モチベーション」をもって自ら進んで構想する。
- ・「大学での設計研究」と「学外活動（オープンデスク等）」を両立させる。
- ・「時代の感性」を共有する。
- ・「家具・インテリア」から「都市・ランドスケープ」まで幅広く興味をもつ。

研究内容は、

- ・地域計画/ランドスケープデザイン/地域複合施設/住空間の設計
- ・デザイン論、設計方法論/プログラムと空間

卒業研究・制作テーマは、

1. 建築デザイン（公共空間，商空間，住空間）
2. 都市・ランドスケープデザイン
3. インテリア・家具デザイン

2001年の研究室の活動内容は、次のようにデザインの領域で多岐にわたっています。2002年も同様の活動を予定しています。

- ・小学校，保健福祉センター，住宅の基本計画
- ・コンペティションへの参加
- ・展覧会のインスタレーション/他大学，他の建築家との共同研究やコラボレーション
- ・学内外の建築イベント，企画への参加等

計————宇杉和夫助教授（駿589-B号室）



人間環境，建築の設計・計画，評価の方法を探究・構築します。

2つのアプローチが可能です。

自分の意見・プランを提案する

（意見・提案を組み立てることを優先する）

資料解釈による実証研究

（自己の資料を作成してから結果・意見を出す）

いずれにしても現在の文化・建築・生活空間に対して、きちんとした批評の眼を養い、将来の展望を築くことが大切です。テーマとしては、次のものを参考にして自由

に発想してください。

1. 空間と景観
2. 場所・環境認知・光と色・心理・生態
3. 住宅・集合居住・都市・田園
4. 日本・アジア・西欧の空間の形成
5. 近代と近代建築の空間構成
6. 公共施設と地域環境・空間のリサイクル
7. 祝祭・神殿・風水
8. 地域環境学習施設・学校
9. 庭園・広場・芸術
10. 共生社会居住・共同居住・都心居住
11. 再開発・居住地改善・コミュニティ・都市再生

具体的・理論的なテーマのどちらでも、自分の目的に積極的に取り組む姿勢を大切に、資料収集の作業や行動を通して研究や提案を行う。提案は意義・意味・方法論を重視する。研究室の制作活動にも興味をもち、提案等を通して社会と触れ合うことも重視します。テーマ・進路などよく相談、指導を受けて進めること。

構————岡村武士助教授（駿946号室）



大型構造物試験棟の管理・運営と実験の指導に当たっていますが、研究の拠点は、駿河台校舎です。

産業廃棄物を単に廃棄物と見るか、それとも宝の山と見るか。環境保全から見ると、それは宝の山となるのです。これらをリサイクルするには、幅広い化学の力が必要となります。例えば、産業廃棄物の貝殻等の自然素材と化学知識が融合したとき、そこに、新素材が実現します。

ガウディの世界や巨大建造物のピラミッド、いずれのテーマも、ものづくりから“自分が打ち込めるものを見つけること”が基本になります。成果は、CD-ROMにまとめますので、写真などをデジタル化し、それをいろいろな形に加工するテクニックが身につくはずで

八海山の夏合宿が定番です。積極的に、楽しく、真剣に取り組むことが条件といえば条件です。

1. 自然素材の構造材としての適用性評価・利用技術開発に関する基礎的研究

Key Word 環境保全，リサイクル，貝殻

2. 建築構造工学に関する研究

Key Word フォルム，Balance，Power

- (1) A. ガウディの形と力～放物線
- (2) ピラミッドの形と力～構法技術

計——片桐正夫教授・大川三雄講師・重枝 豊講師
・浜島一成非常勤講師（駿587-A・B号室）



各自が、興味ある研究テーマを提起することを歓迎します。当研究室は、下記の3つのゼミナールで構成されていますので、それぞれのテーマを参考にして、指導ゼミナールを選択してください。指導ゼミナールは固定されますが、それぞれのゼミで行っている勉強会等には自由に参加することができます。

[アジア班（片桐、重枝）]

1. 東南アジア地域（とくに、アンコール遺跡など）のフィールド・ワークと調査研究
2. 中国、朝鮮の建築に関する研究
3. ベトナムの建築

[日本班（片桐、浜島）]

1. 「日本建築の伝統を探究する」研究
空間構成、意匠、機能
2. 社寺建築の計画、意匠、技術の調査研究
建築近代化のメカニズムを解明
3. 歴史的建造物や街並みなどの保存再生に関する実践的研究
活用の具体的提案

[近代班（大川）]

1. 日本近代建築史に関する研究（モダニズム建築、近代住宅史、近代和風建築）
2. 欧米近代建築史に関する研究
3. 建築ジャーナリズム史

計——小嶋勝衛教授・根上彰生助教授
・宇於嶋勝也講師（駿577-A・B号室）



都市は人びとが集まって生活する空間であるため、さまざまな機能が要求される。快適な生活を保障するため、多くの課題を解決し、新しいシステムを導入しなければならない。

本研究室では、研究テーマとして地区レベルから都市レベルを対象に、以下のような視点を設定している。

1. 歴史——都市計画史、都市計画法制史、都市形成史
2. 調査・解析——都市調査法、土地利用解析、地域構造

解析

3. 計画——都市空間の高度利用（空中権）、伝統的景観の保全、既成市街地の再整備（商店街の再開発・インナーシティ問題等）、居住環境整備（都心居住、生活景）
4. デザイン——都市設計、都市景観調査・解析・計画
5. その他——住民参加、都市開発事業、不動産に関する事業・制度の検討、環境・防災都市に関する研究、etc.

これらの中から、現在または近い将来での都市計画上の課題をふまえ、数回のミーティングにより各自の具体的な研究テーマを設定する。研究は個人またはグループで進める。

なお、次の科目はぜひ取得しておいてほしい。「都市計画」、「建築法規及び行政」「建築設計」、「

その他、テーマによっては「建築史」「統計学」等の科目が、または外国語の語学力が必要な場合もある。

研究室ホームページも参照のこと。

URL : <http://urban.arch.cst.nihon-u.ac.jp/>

構——斎藤公男教授・黒木二三夫短大助教授
・岡田 章講師（駿439-C号室）



研究の視座（空間構造のめざすもの）は、

- ・構造という力学に裏付けられた技術の世界と、造形という人間のゆれ動く感性の世界を結ぶものは何か。構造とデザイン、あるいは構造技術相互を統合するホリスティックな構造デザインとは何か。
- ・構造には本来、安全性と経済性の確保という大役が課せられている。一方、新しい建築空間をきりひらくという創造的役割のあることを、歴史のあゆみは物語っている。空間構造の今日的な役割は何か。
- ・“力と形”が結晶した秩序ある自然界の形象は、空間構造の原形。釣合形態と立体的な構成システムから生まれる合理性は、大スパン架構の有力な手がかりとなる。

基本テーマは、空間構造に関する研究

- ・過去から今日までの空間構造における構造デザインの諸相を調査・分析する。
- ・新しい素材の特性を踏まえながら、空間構造システムを創出する。
- ・構造特性を理論・解析と実験の両面からとらえ、設計基本データを蓄積する。

- ・実際の構造物の性能を確認し、理論と設計・施工との接点をさぐる。
- ・コンピュータや実験を利用した空間構造の性能解析手法を開発する。
- ・CG、CADによる空間構造の企画設計支援を、構造計画画面から展開する。
- ・多くの人々が楽しさや安らぎを共有できる‘つどいの空間’を研究や実例を通して感じとる。
- ・構造教育へのフィードバックを試みる。

2002年のテーマは、

1. 空間構造および構造デザインの歴史と現況
2. テンション材料（ケーブルと膜）を利用した空間構成
3. 木質系（特に間伐材）・アルミ材料による空間構造システムの開発と応用
4. テンセグリック構造の開発と応用
5. 空間構造の施工計画支援手法の開発
6. 新しいエコ・材料の考案と適用性の検討
7. テンポラリー・スペースの考案
8. 構造教育用教材およびソフトの開発

研究室の横顔は、

- ・“よく学び、よく遊ぶ”は研究室のモットー。テニス、スキー等もスポーツ力学で上達したいところ。
- ・合宿、OB会、現場見学会等を通じて、タテ・ヨコのつながりを。他を知り、そして自らを磨く。

構——— 清水五郎教授（駿439-A号室）



当研究室では、主として建設材料と施工に関して、物性の検討や品質評価をはじめ、新素材や新工法の開発等を目標として研究を推進している。課題についてこれまでの実施例を示せば、以下のようなものである。なお、大学院進学希望者の着手を歓迎する。

1. アンコール遺跡の保存に関する材料学的検討*
 2. 低層RC造住宅のプレハブ化に関する研究*
 3. コンクリートの吸水性状に基づく品質の評価法に関する実験的研究
 4. 表面処理による木材の耐火・耐久性向上ならびに人工木材に関する基礎的研究
 5. 建築物の防汚に関する研究
 6. 新素材の用途開発に関する研究
 7. その他
- （1）新素材と新工法に関する調査と評価

（2）特許申請の実践

（3）自主テーマ等

*は「卒業制作」と連携することができる。

構——— 白井伸明教授・森泉和人助手（駿331号室）



本研究室は、教員2名と大学院生5名（博士課程2名、修士課程3名）の構成で、鉄筋コンクリート構造物に関する以下の研究テーマに取り組んでおります。

1. RC造骨組建物の高精度3次元動的応答解析モデルの開発および損傷解析法に関する研究
2. RC構造部材の靱性能評価手法に関する研究
3. RC構造物の強度・靱性・抵抗機構に関する破壊力学的研究
4. RC構造物の耐久性評価手法の開発
5. RC構造物の非破壊検査手法および補修・補強技術に関する研究

また、本研究室を窓口として、清水泰先生（東工大付属高教諭）の研究テーマも選択できます。いずれも難しいような研究テーマ名ではありますが、今後ますます重要性が増す研究内容であり、力学系の学科目に興味のある学生にはやりがいのある卒論テーマになると確信しております。一方、本研究室では学科LANの構築・整備等にも力を入れており、“ひとのために汗を流す”ことのできる学生の来室を期待しております（コンピュータに関する知識は不問、心身ともに健康であること）。

計——— 関口克明教授（駿967-B号室、船622-B号室）



日常生活における快適空間の創造は、建築計画上の基本的な設計指針のひとつです。空間性能をいわゆる設計者のセンスで十分に生かすためには、環境工学的な要因を総合的に把握して設計の中で具体化することが必要で、環境情報の定量化と合理的な環境計画への応用は、質の高い建築空間の創造に欠かせないものとなります。そのためには、環境要因の的確な計測と評価、さらに設計・予測手法の確立が望まれます。

当研究室では、音・光・熱・気流等の環境に関するテーマを扱っていますが、吉野・羽入研究室（住環境総合

評価、環境工学とバリアフリー計画等)と共同で、環境・情報研究室として活動しております。

[音環境]

1. コンピュータシミュレーションによる室内音場の予測と3D音場再生システムによる建築計画への応用
2. 音環境における計測システムの開発
3. 縮尺音響モデルによる室内音響設計手法の検討

[色彩・光環境]

1. 建築空間における照明・色彩計画に関する研究
2. 各種生理量の定量化と空間認知に関する研究

[複合環境]

1. 住宅における複合環境の評価手法に関する研究
2. 快適環境の評価手法に関する研究
3. 微風領域における快適環境の評価について

そのほか、環境工学に関する各自のテーマについても、相談に応じます。

上記一連の研究テーマは、心理評価によるデータの統計処理から最新のデジタル技術、マルチメディアの総合によるもので、多くの基礎知識が要求されますが、研究を通じて十分に修得が可能であり、日頃より建築計画・環境工学に対して興味と理解のある人にとってメリットが大きいと考えます。研究意欲のある人は大いに歓迎いたします。

計—— 関澤勝一教授・柳田 武講師・佐藤直樹助手
(駿579-A・B号室)



[関澤研(関澤, 佐藤)]

1. 小・中学校における新しい教育空間の研究

教育方法の変化に対応するためには、教育空間はいかにあるべきか、また地域社会の中での教育空間はどうあるべきか、といった観点からその計画条件を研究する。

2. 障害児のための教育空間の研究

障害児のための教育空間(知的発達障害、肢体不自由など)の計画条件を文献・観察調査を通して研究する。

3. 子どもの空間に関する研究

少子社会に対応するために、子どもの生活環境の向上を目指して、子どもの遊びや学習の空間を文献・観察調査やワークショップを通して研究する。

[柳田研(柳田)]

1. 計画・設計におけるCAD・CGの活用に関する研究

- (1) CAD・CGによる設計手法(デザイン・シミュレーション、プレゼンテーション)

- (2) 計画・設計におけるネットワークの活用

デジタル・デザイン、VDS、デザイン・コラボレーション、等

2. 計画手法・設計手法に関する研究

- (1) 計画・設計情報のあり方とその活用、WWW情報の利用

- (2) 平面計画、配置計画における数理的手法とその応用

3. 企画立案・施設管理(FM)に関する研究

- (1) 企画段階における情報の収集・分析・企画立案の手法

- (2) FMによる施設の有効な管理・運用とそのシステム

いずれも「建築の企画・計画・設計・製図という一連の流れの中で、いかにコンピュータを活用するか」ということが大きな共通のテーマであるが、これらに関連したものであれば独自のテーマでもよい。

計—— 高宮真介教授・佐藤慎也助手(駿578-A号室)



私達の研究室では、計画よりも設計を、理論よりも実際の作品を通して建築を学んでほしいと考えています。そして、建築を単なる「もの」としてではなく、それが成立する社会、文化などを包摂する環境の構成要素として捉え、研究を行っていきます。研究テーマは、このような主旨を理解した上で各自が自主的に設定し、指導を受けた上で進めていきます。また、当研究室の性格上、設計に興味を持ち、将来設計を志す熱意のある人を歓迎します。研究室としての共通のテーマは特に設定しませんが、以下のようなものが例として挙げられます。

1. 設計手法に関する研究

プログラミングから建築創造に至るまでの実証的な例題の研究。

2. 作品分析、作品評論に関する研究

近代建築以降の実際の作品について、その歴史的背景、地域文化的な背景を考察し、作品分析、作品評論を試み、研究する。

3. 建築と風景の構築に関する研究

建築の場所性に焦点を当て、風景の構築の手法を研究し、ランドスケープデザインやアーバンデザインと建築デザインの関係について研究する。

計———野村 歡教授・石田道孝講師・八藤後 猛助手
(駿965号室)



[野村研(野村, 八藤後)]

形態や機能本位に設計されている最近の建築物について、設計の原点に戻り「人間」(健康な成人, 高齢者・障害者を含めたすべての人々)にとって真に好ましく、かつ望ましい建築物とするための方策を技術的な面, 社会政策的な面をあわせて探究します。

研究室では、個人の自主性を尊重しています。研究室で継続して行われている研究を共同で行うほか、個人が興味をもった独自のテーマで研究を進めていくことでもかまいません。以下に、これまでに取り組まれている主な研究をあげますが、みなさんの自主的なテーマ設定を歓迎します。詳細はホームページでもご覧になれます。

URL : <http://sociotech.arch.cst.nihon-u.ac.jp/>

1. 住環境に関する研究
2. 生活や就労のための機器・設備に関する研究
3. 社会福祉施設, リハビリテーション施設
4. 福祉のまちづくり(都市環境, 公共建築, 交通施設)
5. 子どもや高齢者の安全計画に関する研究
6. 就労環境に関する研究

それぞれについて研究形態は、社会調査(聞き取り, アンケート, 実地調査), 実験研究などがあります。

[石田研(石田)]

建築空間・建築環境と地域環境を福祉の視点から見直しを行い、現在と将来のあるべき姿を追求する。建築のもつ新しい価値を提案してほしい。研究室では主に高齢者・障害者など、心身の障害をもつ人や社会的にハンディキャップをもつ人々を対象にして住環境, 地域環境を舞台に多様な研究に取り組んでいる。経済環境の変化と高齢者社会に突入した現在、さまざまな社会システムが見直されなければならない状況を迎えている。卒研生の柔軟な思考と真摯な取り組みで、有意義な卒業研究となるよう期待しています。

1. 福祉施設の統合複合化に関する研究
2. 地域活性化と福祉関連利用施設のかかわり方に関する研究
3. 地域リハビリテーション・サービス, 在宅福祉サービスの効果的実施と地域施設のかかわり方に関する研究
4. ハウスアダプテーションのための住宅改造改修に関する研究
5. その他, 福祉と地域・不動産に関する研究

計———早川 眞教授・蜂巢浩生講師(駿453号室)



建築設備, 建築環境を専門とする研究室である。建築設備では「環境負荷低減に配慮した省エネルギーシステムの実現と運用」や「医学や薬学の進歩に貢献する実験動物施設」に関する研究などを、建築環境では「通風・換気・気流や熱環境」に取り組んでいる。

以下に、現在実施中の卒業研究を紹介する。

1. CO₂排出量の削減に配慮した都心立地型大学施設の設備システムの研究

地球温暖化の防止が緊急を要する課題である。2001年11月にモロッコで行われた第7回気候変動枠組み条約締結国会議で、わが国はいわゆる京都議定書への批准に同意した。したがって、遅くとも2012年までにCO₂排出量を1990年の6%減としなければならない。しかし、現状のままでと減少どころか、建築分野で15%の増加となるので、エネルギー大量利用の施設は早晚、CO₂排出量の削減や省エネルギーを求められるであろう。本研究はこれに備えて日大駿河台キャンパスの省エネルギー、省資源を図り、同種の大学施設の計画資料を得ることを目標としている。

平成14年度は理工学部の特別推進研究にも選ばれているので、重点的に推進する。

2. 超高層建物への自然換気の導入の研究

グリーンビル(環境負荷低減建築)の具体案の一例として、自然換気の導入を実現するための各種問題点の解決に取り組んでいる。平成13年度は、実験装置の組立てと大型吹出し口からの給気方法に関する実験を行った。企業の研究所と共同研究。

なお、今年度は新たに、室内の換気状態を評価する研究にも着手する予定である。

3. 実験動物施設の環境制御に関する研究

われわれは日々の生活の中で、実験動物から得られる実験結果によって生み出される多くの技術・製品の恩恵を受けている。その実験成績の精度を保証するものは実験動物の遺伝的統御と、動物を取り巻くさまざまな環境因子の適切な制御である。また、実験動物施設はエネルギー多消費型施設であるため、省エネルギー対策についても関心が高まってきている。本研究は環境工学の分野から実験動物施設に求められる設備・環境について、その基準の充実や体系化に取り組む。

構——半貫敏夫教授（駿432-A号室）



1. 鋼構造物の耐震設計に関するP- δ 効果の影響
2. 鋼構造物の耐震性能に関する偏芯の影響
3. 鋼構造部材および接合部のエネルギー吸収性能
4. 屋根雪荷重評価に関する解析的研究
5. 屋根雪滑落現象の動的シミュレーション
6. 積雪沈降力による構造物の破壊現象の解析

鉄と雪が研究の対象です。だいたいのところ実験4割、解析6割のエネルギー配分を予定しています。新年度の研究スタッフは教員1名+大学院生6名です。博士課程の高橋君は南極・昭和基地で越冬（冬眠ではありません）観測を始めました。南極とはe-mailで研究連絡をしています。伝統ある日大構造力学研究室の一員として「構造力学をたのしむ研究室」にしようといつも心がけています。いま、研究テーマが決められなくても、構造で何かやってみようと考えている夢と意欲のある学生諸君を歓迎します。研究室ではチームワークが大事だと、うちの院生はよく言っています。

卒業生の進路は、学部生が進学2、住宅5、建設3、情報1、院生では住宅1、情報1、不動産1、市役所1で、割合とバランスの取れた就職先になりました。

構——平山善吉教授・斉藤俊一助手（駿431-A号室）



1. 木質構造の構造特性に関する研究
2. 南極昭和基地の建物に関する研究
3. 石膏コンクリートおよびアルミナセメントの低温特性に関する研究

当研究室では木質材料のLVL材（Laminated Veneer Lumber）、集成材を用いた構造物の研究を構造・材料の両面から行っている。特に現在は、LVL材を用いた構造システムの開発に関する実験的研究を行っている。

また、日本の南極観測基地の建物に関する研究においては草分け的存在であり、昨年度の実験は、高耐久性木材構造を視野に入れた耐力壁交換可能な構造システムの開発を、一般建築から南極基地建物にまで応用すべく研究を行っている。昭和基地建物も築約30年を経過し、老朽化も進んでいる。そんな中、研究室の課題は絶えない。氷床建物の基礎的研究、不燃化木質系による新構造シス

テムの研究、石膏コンクリートを用いた研究等が主な内容である。

上記の他、研究室では電算機を用いた構造設計手法の修得も大きな課題の一つである。その主な目的は、電算機を用いた設計手法が多岐にわたっているため、設計における一連の流れをつかみ、構造的センスを養うことにある。これらの演習は、多数のパソコン用ソフトを用い、最先端の構造設計手法の話題も交えながら進めていく。

研究室は4号館の3階にある。研究活動は構造実験と解析を主体に活動を進めている。当研究室では「よく学び、よく遊べ」をモットーとしている。

研究室のここ数年の就職状況は、1.鹿島建設(株)、2.大成建設(株)、3.(株)竹中工務店、4.西松建設(株)、5.共立建設(株)、6.積水ハウス(株)、7.大成プレハブ(株)、8.ミサワホーム(株)等のほか、大手建設会社に就職している。

構——三橋博巳教授（駿332号室）



当研究室では、ゼミで構造から計画まで幅広い多様なテーマについて勉強した後、個別のテーマごとに分かれて実験や現地調査などをもとに研究を行っている。

研究テーマは以下の通りである。

1. 風洞実験による建築物のシミュレーション

(1) 極地・多雪地域における建築物の人工吹雪風洞実験および現地調査

(2) 建築物の積雪荷重に関する研究

2. 高強度鉄筋コンクリート構造に関する研究

高強度材料を用いた鉄筋コンクリート有孔梁の耐力および変形に関する研究

3. 都市・建築の防災計画に関する基礎研究

地震・風・雪などによる自然災害と都市の安全性、防災計画に関する調査研究

4. 都市・建築物の維持管理・ライフサイクルマネジメントに関する研究

都市建築物の寿命実態調査と耐用年数、マンションのストック、維持保全、建て替え、ライフサイクル評価等の調査研究

5. 不動産の評価に関する研究

建物の評価、固定資産税評価、中古建物の評価、家屋の税制度などの調査研究

6. 建築・都市の環境システムに関する研究

環境負荷、環境共生、環境管理、居住環境、廃棄物管

理, リサイクル, 都心居住など, 都市の環境改善に関する調査研究

平成13年度卒業生は, 学部生15名で, 設計1名, 不動産関係3名, 住宅関係3名, 施工2名, 大学院3名のほか, 多方面にわたる。

計————— 本杉省三教授・佐藤慎也助手(駿578-B号室)



研究テーマは各自の興味に基づいた申し出により, 相談の上で決められる。そのため, 自ら進んで考え, 行動する学生であることが望まれる。

研究室としては, オペラ, 演劇, 音楽, 舞踊, ショーなどさまざまな舞台芸術・パフォーマンスのための空間について調査・研究をする機会が多く, こうした活動を通して, 地域文化の在り方や人間生活の問題に関心を持っている。このため, 劇場・ホールをはじめとしたさまざまな人々との幅広い交流や活動が不可欠である。人々のところに出掛け, 積極的に話を聞ける行動力がなければならない。

継続的研究テーマは, 以下の通りである。

1. 劇場およびコンサートホールに関する研究

- (1) 舞台空間の使われ方
- (2) ホワイエ内の観客サービス機能
- (3) 客席の構成とデザイン
- (4) フレキシブルな上演空間の可能性

2. 地域文化施設に関する研究

- (1) 地域文化施設の利用内容・実態
- (2) 練習施設利用者の文化活動
- (3) 特色ある地域文化活動と施設

3. 野外劇場施設

4. 祭りの空間に関する研究

5. 現代芸術のための空間に関する研究

その他, 各自が興味を持っている具体的なテーマがあれば相談に応じる。

計————— 若色峰郎教授・渡辺富雄助手(駿966号室)



私達の研究室では, 建築の設計と計画の関連の中で建築・都市空間をとらえることを研究の主軸にしているの

で, 建築の設計に興味を持ち, 熱意ある学生を望んでいる。

卒業研究は, その性質上, 各自の研究に対する意欲と発想, 自主的な活動によって成り立つものと考えている。したがって, 研究テーマは各自の申し出に対し相談の上で決められるので, テーマに対する視点や具体的な進め方等について関連する資料を含めて提示してほしい。

これまでの研究室で行っている研究テーマは, 次の通りである。

1. スポーツ・レクリエーション施設に関する研究

施設タイプ別にみた, 施設の利用・使われ方などの実態調査を通した新しい施設像の研究, および文献資料をベースにした研究。

2. 広域圏のスポーツ・レクリエーション施設の研究

3. 地域の公共・民間のスポーツ施設の研究

4. 生涯学習関連施設の研究

地域社会の中で生涯学習施設はどうあるべきか, 施設系別に, 管理者や利用者などの立場からみた現状やあり方についての調査研究。

5. 建築空間の計画・設計手法の研究

具体的な作品や作家を例題として, その成立背景を踏まえて, 分析・考察を試みる。

(詳細はガイダンス時に資料を配付し説明する)

短期大学部建設学科所属研究室

以下の研究室では, 建築学科教室の承認を得た上で, 卒業研究の指導を受けることができる。

構————— 岡田 満助教授(駿333号室, 船926-A号室)



当研究室は, 鉄筋コンクリート(RC)構造およびプレストレストコンクリート(PC)構造の研究を対象としている。

1. PC架構の復元力特性に関する研究

PC造の建物は通常, 柱, 壁をRC造とし, 梁をPC造としている。この梁が構造体全体の履歴性状に及ぼす影響について検討する。

2. RC構造物の柱, 梁接合部の破壊性状に関する研究

地震力が作用するRC架構の接合部では隣接する柱と

梁から大きなせん断力が導入されるので、靱性の高い復元力特性を得るための十分な補強が必要である。また、接合部は柱、梁に比べて補修が困難なため、破壊を避けねばならない。本研究では、柱、梁接合部の破壊性状を実験的に検討する。

計————— 小石川正男教授・田所辰之助講師
・森田吉晃講師（駿333号室，船546-B・921-B号室）



1. 設計競技（デザインコンペ）を通しての創作，設計活動
2. 建築設計競技に関する史的研究
3. ヨーロッパ近代建築史および近・現代建築論
4. 印旛沼の水環境とその保全に関する研究

主に設計，デザイン活動を中心としながら，建築論，建築史，環境計画の分野について学習する。上記の4つのテーマのうち，1.を共通とし，2.3.および4.から一つを選択して卒業研究のテーマとする。設計，研究活動に熱意をもって取り組めることを条件とする。

構————— 下村幸男教授（駿333号室，船926-C号室）



本研究室では，地震工学，中でも，地盤と建物との動的相互作用と呼ばれている分野の研究を行っている。同一の設計に基づいて建設された建物でも，建設地盤（地域，土質等）の違いにより，地震に対する性能は異なる。人と人との相性と異なり，建物と地盤との場合は性質（固有周期等）に近いことは一般的に好ましくない。

卒業研究として，次の2テーマを計画している。パソコンアレルギーでない，ガッツのある諸君を歓迎する。

1. 杭支持建物の合理的な耐震設計法に関する研究

船橋キャンパス内の実大杭基礎モデル群を対象にした加振実験を平成13年度に実施したが，卒業研究では，同実験のシミュレーション解析を予定している。

2. 地盤免震に関する研究

産業廃棄物を用いた地盤改良体と杭支持建物の動的相互作用について解析面から研究する。

構————— 内藤正昭講師（駿333号室，船926-B号室）



南極昭和基地の観測用建物の下部構造部材として，アルミナセメントコンクリートが打設されて約35年が経過している。当研究室では昭和基地から持ち帰ってきた骨材を用い，低温環境下で打設・養生されたアルミナセメントコンクリートやアルミナセメントを用いた鉄筋コンクリート梁の力学的特性について，実験的研究を継続して行っている。

1. アルミナセメントコンクリートの低温環境下での強度に関する研究

本年度は，昭和基地の建物建設時期の気象条件（0℃）を大型低温室内に再現し，昭和基地から持ち帰った総ての材料（アルミナセメント・骨材・混練水）を用い，打設および養生したコンクリートの初期強度発現について実験的研究を行う。

また，アルミナセメントや低温環境下でのコンクリートに関する論文調査を行う。

2. 木質構造の構造システムに関する研究

これまでの昭和基地建物に用いられている，木質系プレファブ建築のシステムに関する研究で，平山研究室と共同研究を行っていく。

構————— 中山 優助教授（駿333号室，船545-B号室）



当研究室は，鉄筋コンクリート（RC）およびプレストレストコンクリート（PC）の分野を研究対象としている。

1. 開口PCはりの研究

数年来実験的および理論的な研究を続けてきた結果，特別な開口補強を施さない場合について設計手法を確立するに至った。しかしながら，細部について不明な点が残っているので，再度続けて行う。

2. プレキャスト部材の接合に関する研究

最近はプレキャストの利用，特に場所打ちとプレキャストを一体化して用いるハーフプレキャストの利用が急増している。この両者の結合にはコッターと結合筋が用いられるが，結合鉄筋の力学的挙動についてはなお不明の部分があり，また，接合面のコンクリートのせん断伝達機構に不明の点があるので，主に実験的研究を行う。

3. プレキャストPCの柱接合部に関する実験的研究

地震時の挙動に関する接合部の弾塑性性状を実験的に調べ、プレキャストPC部材の履歴復元力特性のモデル化を行う。

計

吉野泰子助教授・羽入敏樹講師

(駿967-B号室, 船545-A号室)



1. 中国都市住宅における環境・エネルギー消費の実態把握と持続可能な環境形成技術の開発に関する研究

(国際共同研究 日大・東北大・中国西安建築科技大学)

中国の都市住宅における室内熱空気環境・エネルギー消費量・換気・空調設備の実態をアンケート調査および実測により明らかにするとともに、室内熱空気の予測モデルを用いた数値計算等によって、住宅の断熱・気密化、パッシブソーラー手法の必要性を検討し、省エネルギー技術、持続可能な居住環境形成技術を開発していく。

2. 中国都市部における居住環境の実態と生体情報に関する遠隔型ヘルスケアシステムの開発 (国際共同研究 日大・東北大・武庫川女子大・中国西安建築科技大学)

中国都市住宅の生活下における居住環境の実態を明らかにし、住戸性能や冷暖房システム、気候特性による生理心理反応への影響を居ながらにして把握でき、超高齢社会においても、予防医学の観点から、状況の認知判断を遠隔地から支援し、注意を喚起するシステムを開発していく。

3. 古代民居・民族建築に学ぶ自然素材(エコマテリアル)を利用した建築に関する調査研究

民家リサイクル・循環型社会・エコロジカル建築に関するデータベース作成。

4. 「環境に優しいキャンパス」を創ろう。

環境保全に努めるキャンパスとしてのステータスシンボル“ISO14001”国際認証取得のための手順を検討する。

5. 地球環境時代における住環境教育の試み

環境家計簿によるライフスタイルチェックと住まいの省エネ診断等、環境教育を考える。

6. 建築空間における響きの研究

世の中には奇跡的に美しい響きがあります。ウィーンのムジークフェラインザールのきらびやかな響き、ヨーロッパの教会の荘厳な響き……。これらは建築空間によ

って生み出されます。また、建築空間だけでなく森の響きにも着目して、屋外コンサート空間の研究にも取り組んでいます。

7. 自然な変動を利用した快適環境の制御方法に関する研究

不快な要素を取り除いても最適な環境はできません。むしろ人が快適と感じる変動を積極的に与えることによって、完全に一定に制御された環境でない、自然で快適な環境をつくるための研究です。そのために山や川、森などの自然の快適環境を調査します。

* 以上の研究は、建築学科関口研究室と共同で取り組んでいます。

『駿建』2001-11号掲載の「2001年度 日本建築学会大会 建築学科教室関係者発表論文リスト」に、下の論文を追加します。

建築計画

5587 新しい家族像と住まい像に関する調査研究 その1 建築学科の学生の考える新しい環境像, 社会像について ○塚部 彰・宇杉和夫・塚原由梨・武田千織・新井豪二・望月 強・稲葉 修・桶爪乃理子・森 大樹

5588 新しい家族像と住まい像に関する調査研究 その2 建築学科の学生の考える家族像 価値と危機 ○桶爪乃理子・稲葉 修・宇杉和夫・塚原由梨・武田千織・新井豪二・望月 強・塚部 彰・森 大樹

5589 新しい家族像と住まい像に関する調査研究 その3 建築学科の学生の考える家族と仕事, 地域など ○宇杉和夫・塚原由梨・武田千織・新井豪二・望月 強・稲葉 修・桶爪乃理子・塚部 彰・森 大樹

エア・シェルター2001

— Net Reinforced Air-Dome —

宮里直也・木村 純



「両国に遊びに来ていたら、突然大災害が起こって帰れなくなった！」大地震などの災害で帰宅の足が奪われる事態を想定し、段ボールで“家”を作り、宿泊する体験講座が11月23日、江戸東京博物館で行われた。関東大震災や東京大空襲から復興した東京の姿を紹介する「東京建築展」の関連イベントで、一般の親子連れ32名が参加した。段ボールの“家”を風雨から守る巨大なシェルターを、斎藤研究室の大学院生、卒研究生、ゼミ生が中心となって実現した。

シェルターは、空気の圧力で風船のように膨らませたエアドーム。構造形式は「農業用のビニールシート」を「格子状に編まれたネット」で補強した“ネット補強空気膜”，東京ドームと同じ原理である。このドームのテーマは...

- ・高ライズであること。20年前に、わが国の建築界がこぞって取り組んだ大規模エアドームの開発競争。この時の対象は低ライズ形状であった。この競争の中、忘れられた高ライズの魅力の再認識がテーマであった。
- ・建築家、(故)村田豊氏が長年追求し、多くの美しい作品に結実させたネット補強空気膜構造。その透明性や形態自由度の高さを、避難シェルターの居住性の改善に結びつけることも可能ではないか。▶ドームは2つの半球(直径12m)の間に小さな半球(直径8m)が挟まれた形で高さ6mの規模が実現した。
- ・軽量で、収納性・運搬性に優れ、一般の人による施工が可能、さらには、リユースにも対応可などの避難施

設に不可欠な要件を満足するディテールや工法の考案。

▶ビニール膜とネットの役目とシステムの分離。前者は空気の包み込みを、後者は形態の保持と荷重伝搬をそれぞれ分担する。ビニールは立体的裁断を行わない平面膜、折畳み・展開・格納が極めて容易である。

- ・農業用ビニール、ナイロン製防球ネット、リースのH型鋼などの安価な材料で、安全性(耐風性)に優れた構造システムの実現。▶綿密な構造計算、強度試験、試験施工を通したネットの選択。
- ・密閉性に優れ、かつ人の出入りがスムーズな、簡易な開口部の考案▶アコーディオン式エアロック機構を実現。

施工は、まず1.8m幅のシートをテープで貼り合わせることで大きなシートをつくり、所定の位置に裾を折り返して広げる(その大きさは、理工スポーツホールの床面を覆ってしまうほど)。次に、そのシートの上にネットを広げ、外周に配置したH鋼にネットを結び固定する。最後に、5台の送風機により空気を送り込むことでインフレーションを行った。半日程度の準備作業の後、約15分ほどのインフレーション作業で巨大なドームが完成した。

朝日の中、黄金に輝くエアドームの楽しさをわれわれに伝えてくれた体験居住者。電車の騒音以外は快適な一泊であったという。本年の習志野ドームで、昨年の試験施工に続いて、今回使用したエアドームを披露する予定。是非、不思議で楽しい内部空間を味わってほしい。

(みやさとなおや・斎藤研D2、きむらじゅん・斎藤研M1)



アコーディオン式エントランス



シェルター内観



インフレーション作業(少しの風でも大きく揺らぐ)

創造力を触発する！

子どもと一緒にデザインしよう会報告

星野 諭



SOBART うちわ

ワークショップという設計手法が注目されています。関澤研究室のM1星野君は、設計手法の一つとして、子どもと一緒にデザインすることができないか？と考え、これを研究テーマにしています。彼は、千代田区に通学している学生として、地域に密着した活動をしていますので、その報告をしてもらいます。（師範・佐藤直樹）

2001年4月に、子どもたちと遊びたい・触れ合いたい・一緒につくりたいと考え、これに興味のある学生20名ほどで「子どもと一緒にデザインしよう会」をつくりました。このサークルは、子どもに関わる環境デザインを、子どもとともに創造することを目的として、毎週木曜日に定例会を行い、この成果をもとに、主に千代田区を拠点として、児童館や学校、冒険遊び場、まちづくりなどに関わる活動をしています。また、11月より千代田まちづくりサポートの助成（財）千代田区街づくり推進公社）を受け、「子どもと地域の関わりづくり」がテーマに加わりました。義務感ではなく、子どもたちも私たちも「楽しむ」ことをモットーに活動しています。

まず、私たちは子どもを知ることが大切であると考えました。自分たちの子どもの頃と最近の子どもの遊びや生活などを比べ、話し合っていたのですが、直接子どもと遊んだり、生活したりした人が少なく、概念的に考えている傾向がありました。そこで、実際に子どもたちと接することで、子どもたちを理解しようと考えイベントを行いました。

七夕企画「自分自身が短冊になろう！」では、子ども

と遊ぶことで、子どもたちを知るという目的で行いました。25mほどの巨大天の川を子どもたちと一緒に作り、白い布を着て、それに願い事や好きなことを描きました。それを着たまま遊び、最後に巨大天の川に寝ころがって、自分の願いを叫びました。

次に、食と街と芸術の融合プロジェクト「神田SOBART」(8/31～9/8)の企画・運営をart@LIFEと神田蕎麦の会との共催で行いました。これは、旧神田エリアの老舗蕎麦屋に、現代美術作品を展示し、蕎麦を食べながら街歩きとアートを楽しむというものです。これに地域の子もたちも関われるように、子どもたちによる「未来のそば」コンテストやうちわスタンプラリーなどの企画・運営をしました。会期前に、千代田区の児童館を訪れ、未来のそばをテーマにした、うちわデザインのワークショップを行い、集まった107枚（期間中に展示）のデザインの中から、最優秀賞と各店舗賞を決定（蕎麦屋さんを審査員に迎えた）し、最優秀賞に選ばれたデザインは、「神田SOBART」で配布するうちわ5,000枚の片面にプリントされました。その裏は、地図とスタンプラリーになっていて、このうちわを持って、蕎麦屋めぐりをするというものでした。最終日には、取り壊しの決まっていた家のすべてをキャンバスとして、子どもたちと一緒に「空き家らくがき大会」も行い、家中に落書きをしました。

そして、年末には地元の高校生と一緒に、西神田児童館と一番町児童館で「昔あそびをしよう！」(巨大福笑い12m や手作り遊び 羽根つき、めんこ、かるた、風



自分自身が短冊になろう！



空き家らくがき大会



巨大福笑い

あげ、こま)を行いました。家の人が子どもの頃にやったお正月遊びを子どもたちに聞いてきてもらい、それを一緒に作り・遊び・持ち帰り、お正月に家で遊んでもらいました。遊びを通した世代を超えたコミュニケーションプロジェクトでした。

そして今は、子どもと地域の関わりが希薄になりつつある中で、子どもが日常的に利用する場所を子どもと一緒にデザインすることから、子どもと地域の関わりづくりをしようとしています。単発のイベントだけではなく、日常の中で「地域」を取り上げ、試行錯誤するプロセスを大切に、地域のひとと学び合い、子どもと地域とが「継続して関わり続けること」が大切であると考えています。

具体的には、子どもが身近な環境を通して自ら問題を見つけ、調べ、学習する。まちを取り上げた絵本、地図、模型、すごろくなどをつくり、日常の中で活用すること、子ども縁日のときの、ロープや廃材を利用した冒険遊びイベント、こんなまちに住みたいな！コンテスト、学校と公園、その間の道を、子どもと一緒に考え、デザインすること、などの活動です。

そして、子どもたちが「まちには、こんな楽しいことがあるんだ。僕たちにもこんなことができるんだ。こんな面白いまちに将来も住みたい」と思ってくれるようなまちにしたいと考えています。

(ほしのさとる・関澤研 M 1)

■ 渡辺富雄助手、若色峰郎教授、古越祐二氏(大学院建築学専攻OB・00年修了、現梓設計)連名の原著論文「公共体育館に設置されたトレーニングルームの施設内容とその特性」が、日本建築学会計画系論文集No. 549号(2001年11月号)に掲載された。

■ 田治見宏名誉教授、池田能夫氏(大学院建築学専攻OB・95年修了、現大成建設)他は、2001年8月にワシントンD.C.で開催されたSMIRT16(16th International Conference on Structural Mechanics in Reactor Technology)にて、「Impedance Analysis of a Foundation Supported on a Sloping Layered Soil」と題して発表した。また、同会議にて、下村幸男短大教授は、安達洋教授(海洋建築工学科)他と連名の論文「A Fundamental Study on Dynamic Cross Interaction of Adjacent Structures Supported on Pile Foundations」と、池田能夫氏と連名の論文「A Simple Scheme of Time History Response Analysis with Dynamic Stiffness Depending Strongly on Frequencies」を発表した。

教室ぶろむなーど

■ 2000年12月に設立された日本地震工学会主催の第1回日本地震工学研究発表・討論会が2001年11月28～30日まで、日本学術会議にて開催された。石丸辰治教授、下村幸男短大教授、秦一平氏(大学院建築学専攻OB・99年修了、現理工学研究所)、藤木杏子さん(石丸研M1)連名の論文「軟弱地盤の地盤免震化に関する基礎的研究(その1. 地盤免震実験装置の概要)」、(その2. 実験装置の性能確認実験)」を発表した。また、池田能夫氏(前掲)、下村幸男短大教授は、ポスターセッションで「非線形性を有する埋込み構造物の簡易時刻歴応答に関する研究」を発表した。

■ 末岡佐江子さん(高宮研M1)の「アクティブシルバースペース」が、「JIHaデザインシャレット2001入賞」(主催：(社)日本医療福祉建築協会)を受賞した。少子化によって廃校になった多摩ニュー

ータウンの小学校校舎を対象に、地域居住をサポートするための新たな保健・医療・福祉プログラムを挿入した施設の提案が求められたもの。受賞作品は、「新建築」2002年1月号に、審査委員長・上野淳氏の記事とともに紹介されている。同賞については、[<http://www.jiha.jp/information/01-07.html>]を参照のこと。



アクティブシルバースペース

■ 平山香さん(高宮研M1)の「スーパーの周りで...そだて。」が、「2001年度日本建築学会設計競技 支部入選(関東支部)」(主催：(社)日本建築学会)に選ばれた。今日の課題の多い生育環境のなかに生きる子どもを支援する、子どもの居場所への提案が求められたもの。

● 駿建目次	Feier abend.	2	平成14年度卒業研究テーマ一覧	11
(2002.01 Vol.29 No.4 通巻116号)	フォスターの感動・リーベスキントの衝撃	6	エア・シェルター2001	22
表紙「エア・シェルター2001」	カリフォルニア大学デービス校を訪れて	8	創造力を触発する!	23
設計: 斎藤研究室 撮影: 斎藤公男	2年オリエンテーション報告	10	教室ぶろむなーど	24

『駿建』 発行者・片桐正夫: 千代田区神田駿河台1-8-14 日本大学理工学部建築学科教室 Tel.03(3259)0724 <http://www.arch.cst.nihon-u.ac.jp>
■ 平成13年度編集委員: 半貫敏夫・岡田 章・大川三雄・蜂巣浩生・羽入敏樹・渡辺富雄・佐藤慎也・佐藤直樹 ■ 印刷: 奥村印刷株式会社

あげ、こま)を行いました。家の人が子どもの頃にやったお正月遊びを子どもたちに聞いてきてもらい、それを一緒に作り・遊び・持ち帰り、お正月に家で遊んでもらいました。遊びを通した世代を超えたコミュニケーションプロジェクトでした。

そして今は、子どもと地域の関わりが希薄になりつつある中で、子どもが日常的に利用する場所を子どもと一緒にデザインすることから、子どもと地域の関わりづくりをしようとしています。単発のイベントだけではなく、日常の中で「地域」を取り上げ、試行錯誤するプロセスを大切に、地域のひとと学び合い、子どもと地域とが「継続して関わり続けること」が大切であると考えています。

具体的には、子どもが身近な環境を通して自ら問題を見つけ、調べ、学習する。まちを取り上げた絵本、地図、模型、すごろくなどをつくり、日常の中で活用すること、子ども縁日のときの、ロープや廃材を利用した冒険遊びイベント、こんなまちに住みたいな！コンテスト、学校と公園、その間の道を、子どもと一緒に考え、デザインすること、などの活動です。

そして、子どもたちが「まちには、こんな楽しいことがあるんだ。僕たちにもこんなことができるんだ。こんな面白いまちに将来も住みたい」と思ってくれるようなまちにしたいと考えています。

(ほしのさとる・関澤研 M 1)

■ 渡辺富雄助手、若色峰郎教授、古越祐二氏(大学院建築学専攻OB・00年修了、現梓設計)連名の原著論文「公共体育館に設置されたトレーニングルームの施設内容とその特性」が、日本建築学会計画系論文集No. 549号(2001年11月号)に掲載された。

■ 田治見宏名誉教授、池田能夫氏(大学院建築学専攻OB・95年修了、現大成建設)他は、2001年8月にワシントンD.C.で開催されたSMIRT16(16th International Conference on Structural Mechanics in Reactor Technology)にて、「Impedance Analysis of a Foundation Supported on a Sloping Layered Soil」と題して発表した。また、同会議にて、下村幸男短大教授は、安達洋教授(海洋建築工学科)他と連名の論文「A Fundamental Study on Dynamic Cross Interaction of Adjacent Structures Supported on Pile Foundations」と、池田能夫氏と連名の論文「A Simple Scheme of Time History Response Analysis with Dynamic Stiffness Depending Strongly on Frequencies」を発表した。

教室ぶろむなーど

■ 2000年12月に設立された日本地震工学会主催の第1回日本地震工学研究発表・討論会が2001年11月28～30日まで、日本学術会議にて開催された。石丸辰治教授、下村幸男短大教授、秦一平氏(大学院建築学専攻OB・99年修了、現理工学研究所)、藤木杏子さん(石丸研M1)連名の論文「軟弱地盤の地盤免震化に関する基礎的研究(その1. 地盤免震実験装置の概要)」、(その2. 実験装置の性能確認実験)」を発表した。また、池田能夫氏(前掲)、下村幸男短大教授は、ポスターセッションで「非線形性を有する埋込み構造物の簡易時刻歴応答に関する研究」を発表した。

■ 末岡佐江子さん(高宮研M1)の「アクティブシルバースペース」が、「JIHaデザインシャレット2001入賞」(主催：(社)日本医療福祉建築協会)を受賞した。少子化によって廃校になった多摩ニュー

ータウンの小学校校舎を対象に、地域居住をサポートするための新たな保健・医療・福祉プログラムを挿入した施設の提案が求められたもの。受賞作品は、「新建築」2002年1月号に、審査委員長・上野淳氏の記事とともに紹介されている。同賞については、[<http://www.jiha.jp/information/01-07.html>]を参照のこと。



アクティブシルバースペース

■ 平山香さん(高宮研M1)の「スーパーの周りで...そだて。」が、「2001年度日本建築学会設計競技 支部入選(関東支部)」(主催：(社)日本建築学会)に選ばれた。今日の課題の多い生育環境のなかに生きる子どもを支援する、子どもの居場所への提案が求められたもの。

● 駿建目次	Feier abend.	2	平成14年度卒業研究テーマ一覧	11
(2002.01 Vol.29 No.4 通巻116号)	フォスターの感動・リーベスキントの衝撃	6	エア・シェルター2001	22
表紙「エア・シェルター2001」	カリフォルニア大学デービス校を訪れて	8	創造力を触発する!	23
設計: 斎藤研究室 撮影: 斎藤公男	2年オリエンテーション報告	10	教室ぶろむなーど	24

『駿建』 発行者・片桐正夫: 千代田区神田駿河台1-8-14 日本大学理工学部建築学科教室 Tel.03(3259)0724 <http://www.arch.cst.nihon-u.ac.jp>
■ 平成13年度編集委員: 半貫敏夫・岡田 章・大川三雄・蜂巣浩生・羽入敏樹・渡辺富雄・佐藤慎也・佐藤直樹 ■ 印刷: 奥村印刷株式会社